ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.142

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

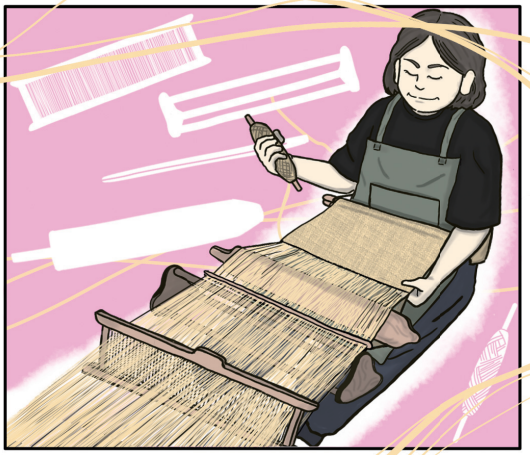
アットゥシ カラ(機織り)

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)

オヒョウやハルニレ、シナノキなど木の靭皮繊維の糸で織られた布、または、その布で縫われた衣服をアイヌ語でアットゥシやアハルシといいます。

アットゥシ織の工程は、糸づくりと織りの作業に分かれます。糸づくりは、素材となる樹皮を立ち木から剥ぐところから始まり、外皮を除去し、内皮のみを温泉や湖沼に浸け置くことで、何層にも重なっている内皮が薄く剥がれます。水温にもよりますが数週間と時間のかかることから、近年は木灰を入れて皮を煮る処理も多くみられます。薄く剥がれた樹皮は細く裂いて軽く撚りを掛け、結び、繋ぎ合わせ二本の長い糸がつくられます。

アットゥシの織組織は経糸と緯糸を一本ずつ交互に交差させる平織りで、織機は腰当を使って経糸の張力を調整しながら織り進める腰機です。織機は、アットゥシカラペ(アットゥシをつくるもの)や筬で緯糸を打込むことからイシタイキ(ものを叩く)の名で呼ばれ、それぞれ独立した八つの部品からなります。織り手に近いところから順に、イシトムシプ(腰当)、トウマムンニ(布巻取り棒)、アフンカニ(緯糸巻き棒)、ペラ(筬)、ペカウンニ(綜絖棒)、カマカプ(上下の糸を開くもの)、ウォサ(筏)、ウライニ(糸端の棒)の八点。筬以外は、織る際に経緯の糸でつながります。十メートルほどの長さの経糸の整経は屋外で行われます。整経後は、腰当を使って経糸を張り、上下の糸を入れ替えるための綜絖棒に端から二つ飛ばしで順に経糸を別糸ですくいあげたら織る前の準備は完了。上下の糸の間に筬を差し入れて立て、開いた糸の間に緯糸を通し、筬で打込みます。次に、綜絖棒を持ち上げて上下の糸を入れ替え、同じように緯糸を通して筬で打込みます。これを繰り返すことでアットゥシは織られていきます。緯糸を通したり打込む際に、織り手が身体を前後に傾けることで経糸を緩めたり、張ったりして織の作業を容易にします。



イラスト/山丸ケニ

アットゥシの製作で最も手間と時間がかかるのが糸づくり。良質のアットゥシを織るには均一な糸づくりが大切だといいます。昨年、沖縄で芭蕉布の織工房を訪ねた際にも、糸づくりは糸芭蕉の栽培に始まり、最も時間がかかり技術の必要な作業だと言っていました。織の技術はもちろんですが、糸づくりが重要ということですね。 J

次回のテーマは「チェプル(魚皮衣)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。